from **SHINRAN: AN INTRODUCTION TO HIS THOUGHT**

by Yoshifumi UEDA and Dennis HIROTA

Kyoto: Hongwanji International Center, 1989.
ALL RIGHTS RESERVED.

もし生れずは仏に成らじと誓ひたまへる御のりなり。

10 この本願のやうは『唯信抄』によくよくみえたり。

11 「唯信」と申すは、すなはちこの真実信楽をひとすぢ

12 にとるこころを申すなり。「唯除五逆誹謗正法」といふは、「唯除」といふはただ除くといふことばなり、

13 五逆のつみびとをきらひ、誹謗のおもきとがをしらせんとなり。このふたつの罪のおもきことをしめして、十方一切の衆生みなもれず往生すべしとしらせんとなり。

2 『無量寿経』のなかに、あるいは「諸有衆生聞其名号　信心歓喜　乃至一念　至心回向　願生彼国　即得往生　住不退転」と説きたまへり。「諸有衆生」といふは、十方のよろづの衆生と申すこころなり。「聞其名号」といふは、本願の名号をきくとのたまへるなり。きくといふは、本願をききて疑ふこころ

1

2

3

4 なきを「聞」といふなり。またきくといふは、信心をあらはす御のりなり。「信心歓喜乃至一念」といふは、「信心」は、如来の御ちかひをききて疑ふこころのなきなり。「歓喜」といふは、「歓」は身をよろこばしむるなり、「喜」はこころによろこばしむるなり、うべきことをえてんずと、かねてさきよりよろこぶこころなり。「乃至」は、おほきをもすくなきをも、ひさしきをもちかきをも、さきをものちをも、みなかねをさむることばなり。「一念」といふは、信心をうるときのきはまりをあらはすことばなり。「至心回向」といふは、「至心」は真実といふことばなり、真実は阿弥陀如来の御こころなり。「回向」は、本願の名号をもつて十方の衆生にあたへたまふ御のりなり。「願生彼国」といふは、「願生」は、よろづの衆生、本願の報土へ生れんとねがへとなり。「彼国」はかのくにと

1 『大無量寿経』言「設我得仏　十方衆生　至心信楽　欲生我国　乃至十念　若不生者　不取正覚　唯除五逆　誹謗正法」文

「大無量寿経言」といふは、如来の四十八願を説きたまへる経なり。「設我得仏」といふは、もしわれ仏を得たらんときといふ御ことばなり。「十方衆生」

2 といふは、十方のよろづの衆生といふなり。「至心信楽」といふは、「至心」は真実と申すなり、真実と申すは如来の御ちかひの真実なるを至心と申すなり。煩

3 悩具足の衆生は、もとより真実の心なし、清浄の心なし、濁悪邪見のゆゑなり。「信楽」といふは、如来の本願真実にましますを、ふたごころなくふかく信じ

4 て疑はざれば、信楽と申すなり。この「至心信楽」は、すなはち十方の衆生をして、わが真実なる誓願を信楽すべしとすすめたまへる御ちかひの至心信楽

5 なり、凡夫自力のこころにはあらず。「欲生我国」といふは、他力の至心信楽のこころをもつて安楽浄土

6 に生れんとおもへとなり。「乃至十念」と申すは、如来のちかひの名号をとなへんことをすすめたまふに、遍数の定まりなきほどをあらはし、時節を定めざることを衆生にしらせんとおぼしめして、乃至のみこと

7 を十念のみなにそへて誓ひたまへるなり。如来より御ちかひをたまはりぬるには、尋常の時節をとりて臨終の称念をまつべからず、ただ如来の至心信楽を

8 ふかくたのむべしとなり。この真実信心をえんとき、摂取不捨の心光に入りぬれば、正定聚の位に定まる

9 とみえたり。「若不生者不取正覚」といふは、「若不生者」はもし生れずはといふみことなり、「不取正覚」は仏に成らじと誓ひたまへるみのりなり。このこころはすなはち至心信楽をえたるひと、わが浄土に

り。「唯説弥陀本願海」と申すは、諸仏の世に出でたまふ本懐は、ひとへに弥陀の願海一乗のみのりを説かんとなり。しかれば『大経』には、「如来所以興出於世　欲拯群萌恵以真実之利」と説きたまへり。「如来所以興出於世」は、「如来」と申すは諸仏と申すなり、「所以」といふはゆゑといふみことなり、「興出於世」といふは世に仏出でたまふと申すみことなり。「欲拯群萌」は、「欲」といふはおぼしめすとなり、「拯」はすくはんとなり、「群萌」はよろづの衆生をすくはんとおぼしめすとなり。仏の世に出でたまふゆゑは、弥陀の御ちかひを説きてよろづの衆生をたすけすくはんとおぼしめすとしるべし。「五濁悪時群生海応信如来如実言」といふは、五濁悪世のよろづの衆生、釈迦如来のみことをふかく信受すべしとなり。「能発一念喜愛心」といふは、「能」はよくといふ、「発」はおこすといふ、ひらくといふ、「一念喜愛心」は一念慶喜の真実信心よくひらけ、かならず本願の実報土に生るとしるべし。慶喜といふは信をえてのちよろこぶこころをいふなり。「不断煩悩得涅槃」といふは、「不断煩悩」は煩悩をたちすてずしてといふ、「得涅槃」と申すは、無上大涅槃をさとるをうるとしるべし。「凡聖逆謗斉回入」といふは、小聖・凡夫・五逆・謗法・無戒・闡提みな回心して真実信心海に帰入しぬれば、衆水の海に入りてひとつ味はひとなるがごとしとたとへたるなり。これを「如衆水入海一味」といふなり。「摂取心光常照護」といふは、信心をえたる人をば、無碍光仏の心光つねに照らし護りたまふゆゑに、無明の闇はれ、生死のながき夜すでに暁になりぬとしるべしとなり。「已能雖破無明闇」といふは、このこころなり、信心をうれば暁になるが

入　如衆水入海一味　摂取心光常照護　已能雖破無明闇　貪愛瞋憎之雲霧　常覆真実信心天　譬如日光覆雲霧　雲霧之下明無闇　獲信見敬得大慶　即横超截五悪趣」文

「本願名号正定業」といふは、選択本願の行といふなり。「至心信楽願為因」といふは、弥陀如来回向の真実信心なり、この信心を阿耨菩提の因とすべしとなり。「成等覚証大涅槃」といふは、「成等覚」といふは正定聚の位なり。この位を龍樹菩薩は「即時入必定」とのたまへり、曇鸞和尚は「入正定之数」とをしへたまへり、これはすなはち弥勒の位とひとしとなり。「証大涅槃」と申すは、必至滅度の願成就のゆゑにかならず大般涅槃をさとるとしるべし。「滅度」と申すは、大涅槃なり。「如来所以興出世」といふは、諸仏の世に出でたまふゆゑはと申すみのりな

3　和朝愚禿釈親鸞「正信偈」文

「本願名号正定業　至心信楽願為因　成等覚証大涅槃　必至滅度願成就　如来所以興出世　唯説弥陀本願海　五濁悪時群生海　応信如来如実言　能発一念喜愛心　不断煩悩得涅槃　凡聖逆謗斉回

4 まはぬときのみなをまうすなり。この如来の尊号は不
可称不可説不可思議にましますゆへに、一切衆生を
して無上大般涅槃にいたらしめたまふ大慈大悲のち
5 かひのみななり。この仏のみなはよろづの如来の名
号にすぐれたまへり。これすなはち誓願なるがゆへな
6 り。「甚分明」といふは、甚ははなはだといふ、すぐ
れたりといふこころなり。分はわかつといふ、よろづ
7 の衆生とわかつこころなり。明はあきらかなりとい
ふ。十方一切衆生をことごとくわかちたすけみちび
8 きたまふことあきらかなり。あはれみたまふことすぐ
れたまへりとなり。「十方世界普流行」といふは、「普」
はあまねく、ひろく、きはなしといふ。「流行」は十
9 方微塵世界にあまねくひろまりて仏教をすすめ行せ
しめたまふなり、しかれば大乗の聖人、小乗の聖
人、善人、悪人、一切の凡夫、みなともに自力の智慧
10 をもては大涅槃にいたることなければ、無碍光仏の御
かたちは智慧のひかりにてましますゆへに、この如来
11 の智願海にすすめいれたまふなり。一切諸仏の智慧を
あつめたまへる御かたちなり。光明は智慧なりとし
るべし。「但有称名皆得往」といふは、「但有」はひ
12 とへにみなをとなふるひとのみ、みな極楽浄土に往
生すとなり、かるがゆへに称名皆得往とのたまへる
13 なり。「観音勢至自来迎」といふは、南無阿弥陀仏は
智慧の名号なれば、この不可思議の智慧光仏のみな
14 を信受して憶念すれば、観音勢至はかならずかげのか
たちにそへるがごとくなり。この無碍光仏は観音とあ
らはれ勢至としめす。ある『経』には観音を宝応声
菩薩となづけて日天子としめす。これはよろづの衆
生の無明黒闇をはらはしむ。勢至を宝吉祥菩薩とな
づけて月天子とあらはれ、生死の長夜をてらして智慧

ごとしとしるべし。「貪愛瞋憎之雲霧常覆真実信心天」
といふは、われらが貪愛・瞋憎を雲・霧にたとへて、
36 つねに信心の天に覆へるなりとしるべし。「譬如日月
覆雲霧雲霧之下明無闇」といふは、日月の、雲・霧に
覆はるれども、闇はれて雲・霧の下あきらかなるがご
とく、貪愛・瞋憎の雲・霧に信心は覆はるれども、往
生にさはりあるべからずとしるべしとなり。
37 「獲信見敬得大慶」といふは、この信心をえておほ
38 きによろこびうやまふ人といふなり。「大慶」はおほ
きにうべきことをえてのちによろこぶといふなり。
「即横超截五悪趣」といふは、信心をえつればすなは
39 ち横に五悪趣をきるなりとしるべしとなり。「即横超」
は、「即」はすなはちといふ、信をうる人はときをへ
ず日をへだてずして正定聚の位に定まるを即といふ
40 なり、「横」はよこさまといふ、如来の願力なり、他
41 力を申すなり、「超」はこえてといふ、生死の大海を
やすくよこさまに超えて無上大涅槃のさとりをひら
42 43 くなり。信心を浄土宗の正意としるべきなり。このこ
ころをえつれば、「他力には義のなきをもつて義とす」
44 と、本師聖人の仰せごとなり。「義」といふは行者の
45 おのおののはからふこころなり。このゆゑにおのおの
のはからふこころをもたるほどをば自力といふなり。
46 よくよくこの自力のやうをこころうべしとなり。

4 「如来尊号甚分明　十方世界普流行
但有称名皆得往　観音勢至自来迎」

（五会法事讃）

1 「如来尊号甚分明」、このこころは、「如来」とまう
2 すは無碍光如来なり。「尊号」といふは南無阿弥陀仏
3 なり。尊はたふとくすぐれたりとなり、号は仏になり
たまふてのちのみなをまうす、名はいまだ仏になりた

と申せば、信と行とふたつときけども、行をひとこゑするとききて疑はねば、行をはなれたる信はなしとききて候ふ。また、信はなれたる行なしとおぼしめすべし。

5 これみな弥陀の御ちかひと申すことをこころうべし。行と信とは御ちかひを申すなり。

6 (b) 誓願・名号と申してかはりたること候はず。

7 誓願をはなれたる名号も候はず、名号をはなれたる誓願も候はず候ふ。かく申し候ふも、はからひにて候ふなり。ただ誓願を不思議と信じ、また名号を不思議と一念信じとなへつるうへは、なんでふわがはからひをいたすべき。ききわけ、しりわくるなどわづらはしくは仰せられ候ふやらん。これみなひがことにて候ふなり。ただ不思議と信じつるうへは、とかく御はからひあるべからず候ふ。往生の業には、わたくしのはからひはあるまじく候ふなり。あなかしこ、あなかしこ。

ただ如来にまかせまゐらせおはしますべく候ふ。

7 「彼仏因中立弘誓　聞名念我総迎来
不簡貧窮将富貴　不簡下智与高才
不簡多聞持浄戒　不簡破戒罪根深
但使回心多念仏　能令瓦礫変成金」
（五会法事讃）

「不簡破戒罪根深」といふは、「破戒」はかみにあらはすところのよろづの道俗の戒品をうけてやぶりすてたるもの、これらをきらはずとなり。「罪根深」といふは、十悪・五逆の悪人、謗法闡提の罪人、おほよそ善根すくなきもの、悪業おほきもの、善心あさきもの、悪心ふかきもの、かやうのあさましきさまざまのつみふかき人を深といふ、ふかしといふことばなり。

をひらかしむるなり。

5 それ浄土真宗のこころは、往生の根機に他力あり、自力あり。このことすでに天竺の論家、浄土の祖師の仰せられたることなり。

3 まづ自力と申すことは、行者のおのおのの縁にしたがひて余の仏号を称念し、余の善根を修行してわが身をたのみ、わがはからひのこころをもつて身・口・意のみだれごころをつくろひ、めでたうしなして浄土へ往生せんとおもふを自力と申すなり。また他力と申すことは、弥陀如来の御ちかひのなかに、選択摂取したまへる第十八の念仏往生の本願を信楽するを他力と申すなり。如来の御ちかひなれば、「他力には義なきを義とす」と、聖人の仰せごとにてありき。

6 7 義といふことは、はからふことばなり。行者のはからひは自力なれば義といふなり。他力は本願を信楽して往生必定なるゆゑに、さらに義なしとなり。

9 しかれば、わが身のわるければ、いかでか如来迎へたまはんとおもふべからず、凡夫はもとより煩悩具足したるゆゑに、わるきものとおもふべし。またわがこころよければ往生すべしとおもふべからず、自力の御はからひにては真実の報土へ生るべからざるなり。

13 「行者のおのおのの自力の信にては、懈慢・辺地の往生、胎生・疑城の浄土までぞ往生せらるることにてあるべき」とぞ、うけたまはりたりし。

6 (a) 信の一念・行の一念ふたつなれども、信をはなれたる行もなし、行の一念をはなれたる信の一念もなし。そのゆゑは、行と申すは、本願の名号をひとこゑとなへて往生すと申すことをききて、ひとこゑをもとなへ、もしは十念をもせんは行なり。この御ちかひをききて、疑ふこころのすこしもなきを信の一念

はよくといふ、「令」はせしむといふ、「瓦」はかはらといふ、「礫」はつぶてといふ。「変成金」は、変成はかへなすといふ、金はこがねといふ。如来の本願を信ずれば、かはら・つぶてのごとくなるわれらを、こがねにかへなさしむとたとへたまへるなり。*あきびと・猟師などは、いし・かはら・つぶてのごとくなるを、如来の摂取のひかりにおさめとりたまふてすてたまはず、これひとへにまことの信心のゆへなればなりとしるべし。摂取のひかりとまうすは、無碍光仏の御こころのうちにおさめとりたまふゆへに金剛の信心とまうすなり。

19 (異本) れうし・あき人さまざまのものは、みないし、かわら・つぶてのごとくなるわれらなり。如来の御ちかひをふたごころなく信楽すれば、摂取のひかりのなかにおさめとられまいらせて、かならず大涅槃のさとりをひらかしめたまふは、すなわちれうし・あき人などは、いし・かわら・つぶてなむどを、よくこがねとなさしめむがごとしとたとへたまへるなり。

8 「自来迎」といふは、自はみづからといふ、弥陀、無数の化仏、無数の化観世音・化大勢至等の無量無数の聖衆、みづからつねにときをきらはず、ところをへだてず、真実信心をえたる人にそひたまひてまもりたまふゆへにみづからとまうすなり。また「自」はをのづからといふ、をのづからといふは自然といふ、自然といふはしからしむといふ、しからしむといふは、行者のはじめてともかくもはからはざるに、過去・今生・未来の一切のつみを善に転じかへなすといふなり。転ずといふは、つみをけしうしなはずして善になすなり、よろづのみづ大海にいればすなはちうしほとなるがごとし。*弥陀の願力を信ずるがゆへに、如来の功徳をえしむるがゆへに、しからしむといふ。はじ

3 すべて、よきひと、あしきひと、たふときひと、いやしき人を無碍光仏の御ちかひにはえらばず、これをみちびきたまふをさきとしむねとするなり。真実信心をうれば実報土にむまるとをしへたまへるを浄土真宗とすとしるべし。総迎来といふは、すべてみな真実信楽あるものを浄土へむかへゐてかへらしむとなり。

5 「但使回心多念仏」といふは、「但使回心」は、ひとへに回心せしめよといふこころなり、回心といふは、自力の心をひるがへしすつるをいふなり。実報土にむまるる人はかならず無碍光仏の心中におさめとりたまふゆへに金剛の信心となるなり。このゆへに「多念仏」とまうすなり。多は大のこころなり、勝のこころなり、増上のこころなり。大はおほきなり、勝はすぐれたり、よろづの善にまされりとしるべし、増上はよろづの善にすぐれたるなり。これすなはち他力本願無上のゆへなり。自力のこころをすつといふは、やうやうさまざまの大小の聖人、善悪の凡夫の、みづからが身をよしとおもふこころをすて、身をたのまず、あしきこころをさかしくかへりみず、また人をよしあしとおもふこころをすてて、ひとすぢに具縛の凡夫、屠沽の下類、無碍光仏の不可思議の誓願、広大智慧の名号を信楽すれば、煩悩を具足しながら無上大涅槃にいたるなり。具縛といふはよろづの煩悩にしばられたるわれらなり。煩は身をわづらはす、悩はこころをなやますといふ。屠はよろづのいきたるものをころしほふるもの、これは猟師といふものなり。沽はよろづのものをうりかふものなり、これはあき人なり。これらを下類といふなり。かやうのあきびと、猟師、さまざまのものは、みないし・かはら・つぶてのごとくなるわれらなり。「能令瓦礫変成金」といふは、「能」

は、無明煩悩われらが身にみちみちて、欲もおほく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむこころおほくひまなくして、臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえずと、水火二河のたとへにあらはれたり。かかるあさましきわれら、願力の白道を一分二分やうやうづつあゆみゆけば、無碍光仏のひかりの御こころにをさめとりたまふがゆゑに、かならず安楽浄土へいたれば、弥陀如来とおなじく、かの正覚の華に化生して大般涅槃のさとりをひらかしむるをむねとせしむべしとなり。これを「致使凡夫念即生」と申すなり。二河のたとへに、「一分二分ゆく」といふは、一年二年すぎゆくにたとへたるなり。諸仏出世の直説、如来成道の素懐は、凡夫は弥陀の本願を念ぜしめて即生するをむねとすべしとなり。

10 「其有得聞彼仏名号」といふは、本願の名号を信ずべしと、釈尊説きたまへる御のりなり。「歓喜踊躍乃至一念」といふは、「歓喜」は、うべきことをえてんずと、さきだちてかねてよろこぶこころなり。「踊」は天にをどるといふ、「躍」は地にをどるといふ、よろこぶこころのきはまりなきかたちなり、慶楽するありさまをあらはすなり。慶はうべきことをえてのちによろこぶこころなり、楽はたのしむこころなり、これは正定聚の位をうるかたちをあらはすなり。「乃至」は、称名の遍数の定まりなきことをあらはす。「一念」は功徳のきはまり、一念に万徳ことごとくそなはる、よろづの善みなをさまるなり。「当知此人」といふは、信心のひとをあらはす御のりなり。「*為得大利」といふは、無上涅槃をさとるゆゑに、「則是具足無上功徳」とものたまへるなり。「則」といふは、すなはちといふ、のりと申すことばなり。如来

めて功徳をえんとはからはざれば自然といふなり。誓願真実の信心をえたるひとは、摂取不捨の御ちかひにおさめとりてまもらせたまふによりて、行人のはからひにあらず、金剛の信心となるゆへに正定聚のくらゐに住すといふ。このこころなれば憶念の心自然におこるなり。この信心のおこることも、釈迦の慈父、弥陀の悲母の方便によりて無上の信心を発起せしめたまふとみえたり。これ自然の利益なりとしるべし。

(*異本) もとめざるに一切の功徳善根を仏のちかひを信ずる人にえしむるがゆへにしからしむといふ。

9 「致使凡夫念即生」といふは、「致」はむねとすといふ、むねとすといふはこれを本とすといふことばなり、いたるといふ、いたるといふは実報土にいたるとなり、「使」はせしむといふ、「凡夫」はすなはちわれらなり、本願力を信楽するをむねとすべしとなり。「念」は如来の御ちかひをふたごころなく信ずるをいふなり、「即」はすなはちといふ、ときをへず、日をへだてず、正定聚の位に定まるを「即生」といふなり、「生」はうまるといふ、これを「念即生」と申すなり。また「即」はつくといふ、つくといふは位にかならずのぼるべき身といふなり。世俗のならひにも、国の王の位にのぼるをば即位といふ、位といふはくらゐといふ、これを東宮の位にゐるひとはかならず王の位につくがごとく、正定聚の位につくは東宮の位のごとし、王にのぼるは即位といふ、これはすなはち無上大涅槃にいたるを申すなり。信心のひとは正定聚にいたりて、かならず滅度に至ると誓ひたまへるなり。これを「致」とすといふ、むねとすと申すは涅槃のさとりをひらくをむねとすとなり。「凡夫」といふ

9 力真宗の本意なり。「截」といふはきるといふ、五悪
10 趣のきづなをよこさまにきるなり。「悪趣自然閉」と
いふは、願力に帰命すれば五道生死をとづるゆゑに
自然閉といふ、「閉」はとづといふなり。本願の業因
11 にひかれて自然に生るるなり。「昇道無窮極」といふ
は、「昇」はのぼるといふ、のぼるといふは無上涅槃
12 にいたる、これを昇といふなり。「道」は大涅槃道な
13 り。「無窮極」といふはきはまりなしとなり。「易往而
無人」といふは、「易往」はゆきやすしとなり、本願
力に乗ずれば本願の実報土に生るること疑なければ、
14 ゆきやすきなり。「無人」といふはひとなしといふ、
人なしといふは真実信心の人はありがたきゆゑに実報
15 土に生るる人まれなりとなり。しかれば源信和尚は、
「報土に生るる人はおほからず、化土に生るる人はす
16 くなからず」とのたまへり。「其国不逆違自然之所牽」

の本願を信じて一念するに、かならずもとめざるに無
11 上の功徳を得しめ、しらざるに広大の利益を得るな
り。自然にさまざまのさとりをすなはちひらく法則な
12 り。法則といふは、はじめて行者のはからひにあら
ず、もとより不可思議の利益にあづかること、自然の
ありさまと申すことをしらしむるを**法則とはいふな
り、一念信心をうるひとのありさまの自然なることを
あらはすを法則とは申すなり。
13 *(注) 為得大利 「ほとけになるべき利益をうる
なりとしるべしとなり」(左訓)
14 **(注) 法則 「ことのさだまりたるありさまとい
ふこころなり」(左訓)
11 又言「必得超絶去 往生安養国 横截五悪
趣 悪趣自然閉 昇道無窮極 易往而無人 其国不
逆違 自然之所牽」(大経) 抄出
1 「心得超絶去往生安養国」といふは、「必」はか
ならずといふ、かならずといふは定まりぬといふここ
ろなり、また自然といふこころなり。「得」はえたり
2 といふ。「超」はこえてといふ。「絶」はたちすてはな
3 るといふ。「去」はすつといふ、ゆくといふ、さると
4 いふなり。娑婆世界をたちすてて流転生死をこえは
5 なれてゆきさるといふなり。安養浄土に往生をうべ
6 しとなり。「安養」といふは弥陀をほめたてまつるみ
7 こととみえたり、すなはち安楽浄土なり。「横截五悪
趣悪趣自然閉」といふは、「横」はよこさまといふ、
よこさまといふは如来の願力を信ずるゆゑに行者の
はからひにあらず、五悪趣を自然にたちすて四生をは
8 なるるを横といふ、他力と申すなり、これを横超と
いふなり。横は竪に対することばなり、超は迂に対す
ることばなり、竪はたたさま、迂はめぐるとなり、竪
と迂とは自力聖道のこころなり、横超はすなはち他

17 といふは、「其国」はそのくにといふ、すなはち安養
浄利なり。「不逆違」はさかさまならずといふ、たが
18 はずといふなり。「逆」はさかさまといふ、「違」はた
がふといふなり。真実信をえたる人は大願業力のゆゑ
19 に、自然に浄土の業因たがはずして、かの業力にひか
るるゆゑにゆきやすく、無上大涅槃にのぼるにきは
20 まりなしとのたまへるなり。しかれば「自然之所牽」
と申すなり。他力の至心信楽の業因の自然にひくな
21 22 り。これを「牽」といふなり。「自然」といふは行者
のはからひにあらずとなり。
12 来迎は諸行往生にあり、自力の行者なるがゆゑ
2 に。臨終といふことは、諸行往生のひとにいふべ
3 し、いまだ真実の信心をえざるがゆゑなり。また十
悪・五逆の罪人のはじめて善知識にあうて、すすめら
4 るるときにいふことなり。真実信心の行人は、摂取

本願念仏の衆生には、影の形に添へるがごとくしてはなれたまはず」とあかせり。しかれば、この信人の人を釈迦如来は、「わが親しき友なり」とよろこびまします。この信心の人を真の仏弟子といへり。この人を正念に住する人とす。この人は、摂取して捨てたまはざれば、金剛心をえたる人と申すなり。この人を「上上人とも、好人とも、妙好人とも、最勝人とも、希有人とも申す」なり。この人は正定聚の位に定まれるなりとしるべし。しかれば弥勒仏とひとしき人とのたまへり。これは真実信心をえたるゆゑにかならず真実の報土に往生するなりとしるべし。

この信心をうることは、釈迦・弥陀・十方諸仏の御方便よりたまはりたるとしるべし。しかれば、「諸仏の御をしへをそしることなし、余の善根を行ずる人をそしることなし。この念仏する人をにくみそしる人をも、にくみそしることあるべからず。あはれみをなし、かなしむこころをもつべし」とこそ、聖人は仰せごとありしか。あなかしこ、あなかしこ。

14 聖教のをしへをもみずしらぬ、おのおのののやうにおはしますひとびとは、往生にさはりなしとばかりいふをききて、あしざまに御こころえあること、おほく候ひき。いまもさこそ候ふらめとおぼえ候ふ。浄土の教もしらぬ信見房などが申すことによりて、ひがざまにいよいよなりあはせたまひ候ふらんをききき候ふこそあさましく候へ。

まづおのおのの、むかしは弥陀のちかひをもしらず、阿弥陀仏をも申さずおはしまし候ひしが、釈迦・弥陀の御方便にもよほされて、いま弥陀のちかひをもききはじめておはします身にて候ふなり。もとは無明の酒に酔ひて、貪欲・瞋恚・愚痴の三毒をのみ好

不捨のゆゑに正定聚の位に住す。このゆゑに臨終まつことなし、来迎たのむことなし。信心の定まるとき往生また定まるなり。来迎の儀則をまたず。

正念といふは、本弘誓願の信楽定まるをいふなり。この信心うるゆゑに、かならず無上涅槃にいたるなり。この信心を一心といふ、この一心を金剛心といふ、この金剛心を大菩提心といふなり。これすなはち他力のなかの他力なり。

また正念といふにつきて二つあり。一つには定心の行人の正念、二つには散心の行人の正念あるべし。この二つの正念は他力のなかの自力の正念なり。定散の善は諸行往生のことばにをさまるなり。この善は他力のなかの自力の善なり。この自力の行人は、来迎をまたずしては、辺地・胎生・懈慢界までも生るべからず。このゆゑに第十九の誓願に、「もろもろの善をして浄土に回向して往生せんとねがふ人の臨終には、われ現じて迎へん」と誓ひたまへり。臨終まつことと来迎往生といふことは、この定心・散心の行者のいふことなり。

13 (a) まことの信心をえたる人は、すでに仏に成らせたまふべき御身となりておはしますゆゑに、「如来とひとしき人」と経に説かれ候ふなり。弥勒はいまだ仏に成りたまはねども、このたびかならずかならず仏に成りたまふべきによりて、弥勒をばすでに弥勒仏と申し候ふなり。その定に、真実信心をえたる人をば、如来とひとしと仰せられて候ふなり。

(b) 「五濁悪世のわれら、釈迦一仏のみことを信受せんことありがたかるべしとて、十方恒沙の諸仏、証人とならせたまふ」と、善導和尚は釈したまへり。「釈迦・弥陀・十方の諸仏、みなおなじ御こころにて、

12 しあはせたまはばこそ、世をいとふしるしにても候はめ。また往生の信心は、釈迦・弥陀の御すすめによりておこるとこそみえて候へば、さりともまことのこころおこらせたまひなんには、いかがむかしの御こころのままにては候ふべき。

15 又曰「言摂生増上縁者　如無量寿経四十八願中説　仏言　若我成仏　十方衆生　願生我国　称我名字　下至十声　乗我願力　若不生者　不取正覚　此即是願往生行人　命欲終時　願力摂得往生　故名摂生増上縁」文

1 「言摂生増上縁者」といふは、「摂生」は十方衆生を誓願にをさめとらせたまふと申すこころなり。「如無量寿経四十八願中説」といふは、如来の本願を説きたまへる釈迦の御のりなりとしるべしとなり。「若我成仏」と申すは、法蔵菩薩誓ひたまはく、もし

2 われ仏を得たらんにと説きたまふ。「十方衆生」といふは、十方のよろづの衆生なり、すなはちわれらなり。「願生我国」といふは、安楽浄利に生れんと願へとなり。「称我名字」といふは、われ仏を得んにわ

3 がなをとなへられんとなり。「下至十声」といふは、名字をとなへられんこと下十声せんものとなり、「下至」といふは十声にあまれるものも聞名のものをも

4 往生にもらさずきらはぬことをあらはししめすとなり。「乗我願力」といふは、「乗」はのるべしといふ、また智なり、智といふは願力にのせたまふとしるべしとなり、願力に乗じて安楽浄利に生れんとしるなり。

5 「若不生者不取正覚」といふは、ちかひを信じたる人、もし本願の実報土に生れずは、仏に成らじと誓ひ

6 たまへるみのりなり。「此即是願往生行人」といふは、これすなはち往生を願ふ人といふ。「命欲終時」

5 みめしあうて候ひつるに、仏のちかひをききはじめしより、無明の酔ひもやうやうすこしづつさめ、三毒をもすこしづつ好まずして、阿弥陀仏の薬をつねに好みめす身となりておはしましあうて候ふぞかし。

しかるになほ酔ひもさめやらぬに、かさねて酔ひを

6 すすめ、毒も消えやらぬになほ毒をすすめられ候ふらんこそ、あさましく候へ。煩悩具足の身なればとて、こころにまかせて、身にもすまじきことをもゆるし、

7 口にもいふまじきことをもゆるし、こころにもおもふまじきことをもゆるして、いかにもこころのままにてあるべしと申しあうて候ふらんこそ、かへすがへす不

8 便におぼえ候へ。酔ひもさめぬさきになほ酒をすすめ、毒も消えやらぬに、いよいよ毒をすすめんがごとし。薬あり、毒を好めと候ふらんことは、あるべくも

9 候はずとぞおぼえ候ふ。仏の御名をもきき念仏を申して、ひさしくなりておはしまさんひとびとは、後世のあしきことをいとふしるし、この身のあしきことをばいとひすてんとおぼしめすしるしも候ふべしとこそおぼえ候へ。

10 はじめて仏のちかひをききはじむるひとびとの、わが身のわろくこころのわろきをおもひしりて、この身のやうにてはなんぞ往生せんずるといふひとにこそ、

11 煩悩具足したる身なれば、わがこころの善悪をば沙汰せず、迎へたまふぞとは申し候へ。かくききてのち、仏を信ぜんとおもふこころふかくなりぬるには、まことにこの身をもいとひ、流転せんことをもかなしみて、ふかくちかひをも信じ、阿弥陀仏をも好みまうしなんどするひとは、もとこそ、こころのままにてあしきことをもおもひ、あしきことをもふるまひなんどせしかども、いまはさやうのこころをすてんとおぼしめ

へかへるといふなり。「迎」といふは、むかへたまふといふ、まつといふこころなり。*選択不思議の本願の尊号、無上智慧の信心をききて、一念もうたがふこころなければ真実信心といふ。この信心をうれば、等正覚にいたりて補処の弥勒におなじくして無上覚をなるべしといへり、すなはち正定聚のくらゐにさだまるなり。このゆへに信心やぶれず、かたぶかず、みだれぬこと金剛のごとくなり。しかれば金剛の信心といふなり。**これを迎といふなり。

(*異本) 選択不思議の本願、無上智慧の尊号をききて、一念もうたがふこころなきを真実信心といふなり、金剛心ともなづく。

(**異本による。)

17 「極楽無為涅槃界　随縁雑善恐難生
故使如来選要法　教念弥陀専復専」(法事讃)

「極楽無為涅槃界」といふは、「極楽」とまうすはかの安楽浄土なり、よろづのたのしみつねにしてくるしみまじはらざるなり、かのくにをば安養といへり、曇鸞和尚はほめたてまつりて安養とまうすとのたまへり。また『論』には「蓮華蔵世界」ともいへり、「無為」ともいへり。「涅槃界」といふは、無明のまどひをひるがへして無上覚をさとるなり、界はさかひといふ、さとりをひらくさかひなりとしるべし。涅槃とまうすにその名無量なり、くはしくまうすにあたはず、おろおろその名をあらはすべし。涅槃をば滅度といふ、無為といふ、安楽といふ、常楽といふ、実相といふ、法身といふ、法性といふ、真如といふ、一如といふ、仏性といふ、仏性すなはち如来なり。この如来微塵世界にみちみちてまします、すなはち一切群生海の心にみちたまへるなり、草木国土ことごとくみな成仏すととけり。この一切有情の心に方便法

といふは、いのちをはらんとせんときといふ。「願力摂得往生」といふは、大願業力摂取して往生を得しむといへるこころなり。すでに尋常のとき信楽をえたる人といふなり、臨終のときはじめて信楽決定して摂取にあづかるものにはあらず。ひごろ、かの心光に摂護せられまゐらせたるゆゑに、金剛心をえたる人は正定聚に住するゆゑに、臨終のときにあらず、かねて尋常のときよりつねに摂護して捨てたまはざれば摂得往生と申すなり。このゆゑに「摂生増上縁」となづくるなり。またまことに尋常のときより信なからん人は、ひごろの称念の功によりて、最後臨終のときはじめて善知識のすすめにあうて信心をえんとき、願力摂して往生を得るものもあるべしとなり。臨終の来迎をまつものは、いまだ信心をえぬものなれば、臨終をこころにかけてなげくなり。

16 「来迎」といふは来は浄土へきたらしむといふこれすなはち若不生者のちかひをあらはすみのりなり。穢土をすてて真実の報土にきたらしむとなり、すなはち他力をあらはすみことなり。また、「来」はかへるといふ、かへるといふは、願海にいりぬるによりてかならず大涅槃にいたるを法性のみやこへかへるとまうすなり。法性のみやことといふは、法身とまうす如来のさとりを自然にひらくなり、さとりひらくときを法性のみやこへかへるとまうすなり。これを真如実相を証すともいふ、無為法身ともいふ、滅度にいたるともいふ、法性の常楽を証すともいふ、無上覚にいたるともまうすなり。このさとりをうればすなはち大慈大悲きはまりて、生死海にかへりいりてよろづの有情をたすくるを普賢の徳に帰せしむといふなり。この利益におもむくを来といふ、これを法性のみやこ

8 9 槃すなはち法性なり、法性すなはち如来なり。宝海と申すは、よろづの衆生をきらはず、さはりなくへだてず、みちびきたまふを、大海の水のへだてなきにたとへたまへるなり。この一如宝海よりかたちをあらはして、法蔵菩薩となのりたまひて、無碍のちかひをおこしたまふをたねとして、阿弥陀仏となりたまふがゆゑに、報身如来と申すなり。これを尽十方無碍光仏となづけたてまつれるなり。この如来を南無不可思議光仏とも申すなり。この如来を方便法身とは申すなり。方便と申すは、かたちをあらはし、御なをしめして、衆生にしらしめたまふを申すなり。すなはち阿弥陀仏なり。この如来は光明なり、光明は智慧なり、智慧はひかりのかたちなり、智慧またかたちなければ不可思議光仏と申すなり。この如来、十方微塵世界にみちみちたまへるがゆゑに、無辺光仏と申す。しかれば、世親菩薩は尽十方無碍光如来となづけたてまつりたまへり。

19 『浄土論』にいはく、「観仏本願力　遇無空過者　能令速満足　功徳大宝海」とのたまへり。この文のこころは、「仏の本願力を観ずるに、まうあうてむなしくすぐるひとなし、よくすみやかに功徳の大宝海を満足せしむ」とのたまへり。「観」は願力をこころにうかべみると申す、またしるといふこころなり。「遇」はまうあふといふ、まうあふと申すは本願力を信ずるなり。「無」はなしといふ、「空」はむなしくといふ、「過」はすぐるといふ、「者」はひとといふ。むなしくすぐるひとなしといふは、信心あらんひと、むなしく生死にとどまることなしとなり。「能」はよくといふ。「令」はせしむといふ、よしといふ、「速」はすみやかにといふ、疾きことといふなり、「満」はみつと

身の誓願を信楽するがゆへに、この信心すなはち仏性なり、この仏性すなはち法性なり、法性すなはち法身なり。しかれば仏について二種の法身ましまします、ひとつには法性法身とまうす、ふたつには方便法身とまうす。法性法身とまうすは、いろもなし、かたちもましまさず。しかればこころもおよばず、ことばもたえたり。この一如よりかたちをあらはして方便法身とまうす、その御すがたに法蔵比丘となのりたまひて不可思議の四十八の大誓願をおこしあらはしたまふなり。この誓願のなかに、光明無量の本願、寿命無量の弘誓を本としてあらはれたまへる御かたちを、世親菩薩は尽十方無碍光如来となづけたてまつりたまへり。この如来すなはち誓願の業因にむくひたまひて報身如来とまうすなり、すなはち阿弥陀如来とまうすなり。報といふはたねにむくひたるゆへなり。この報身より応化等の無量無数の身をあらはして、微塵世界に無碍の智慧光をはなたしめたまふゆへに尽十方無碍光仏とまうすひかりの御かたちにて、いろもましまさず、かたちもましまさず、すなはち法性法身におなじくして、無明のやみをはらひ、悪業にさへられず、このゆへに無碍光とまうすなり。無碍は有情の悪業煩悩にさへられずとなり。しかれば阿弥陀仏は光明なり、光明は智慧のかたちなりとしるべし。

18 本願一乗円融無碍真実功徳大宝海。

いま一乗と申すは本願なり。円融と申すは、よろづの功徳善根みちみちてかくることなし、自在なるこころなり。無碍と申すは、煩悩悪業にさへられず、やぶられぬをいふなり。真実功徳と申すは名号なり。一実真如の妙理、円満せるがゆゑに、大宝海にたとへたまふなり。一実真如と申すは無上大涅槃なり。涅

こころえつるのちには、この自然のことはつねに沙汰すべきにはあらざるなり。つねに自然を沙汰せば、義なきを義とすといふことは、なほ義のあるになるべし。これは仏智の不思議にてあるなるべし。

顕浄土真実教行証文類

1 （序）ひそかにおもんみれば、難思の弘誓は難度海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する恵日なり。しかればすなはち浄邦縁熟して、調達、闍世をして逆害を興ぜしむ。浄業機彰れて、釈迦、韋提をして安養を選ばしめたまへり。これすなはち権化の仁、斉しく苦悩の群萌を救済し、世雄の悲、まさしく逆謗闡提を恵まんと欲す。ゆゑに知んぬ、円融至徳の嘉号は悪を転じて徳を成す正智、難信金剛の信楽は疑を除き証を獲しむる真理なりと。

しかれば凡小修し易き真教、愚鈍往き易き捷径なり。大聖一代の教、この徳海にしくなし。穢を捨て浄を欣ひ、行に迷ひ信に惑ひ、心昏く識寡く、悪重く障多きもの、ことに如来の発遣を仰ぎ、かならず最勝の直道に帰して、もつぱらこの行に奉へ、ただこの信を崇めよ。ああ、弘誓の強縁、多生にも値ひがたく、真実の浄信、億劫にも獲がたし。たまたま行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ。もしまたこのたび疑網に覆蔽せられば、かへつてまた曠劫を経歴せん。誠なるかな、摂取不捨の真言、超世希有の正法、聞思して遅慮することなかれ。

ここに愚禿釈の親鸞、慶ばしいかな、西蕃・月支の聖典、東夏・日域の師釈に、遇ひがたくしていま

いふ、「足」はたりぬといふ。「功徳」と申すは名号なり、「大宝海」はよろづの善根功徳満ちきはまるを海にたとへたまふ。この功徳をよく信ずるひとのこころのうちに、すみやかに疾く満ちたりぬとしらしめんとなり。しかれば、金剛心のひとは、しらずもとめざるに、功徳の大宝その身にみちみつがゆゑに大宝海とたとへたるなり。

20 「自然」といふは、「自」はおのづからといふ、行者のはからひにあらず、「然」といふは、しからしむといふことばなり。しからしむといふは、行者のはからひにあらず、如来のちかひにてあるがゆゑに法爾といふ。「法爾」といふは、この如来の御ちかひなるがゆゑに、しからしむるを法爾といふなり。法爾はこの御ちかひなりけるゆゑに、およそ行者のはからひのなきをもつて、この法の徳のゆゑにしからしむといふなり。すべて、ひとのはじめてはからはざるなり。このゆゑに、義なきを義とすとしるべしとなり。

「自然」といふは、もとよりしからしむるといふことばなり。弥陀仏の御ちかひの、もとより行者のはからひにあらずして、南無阿弥陀仏とたのませたまひて迎へんと、はからはせたまひたるによりて、行者のよからんとも、あしからんともおもはぬを、自然とは申すぞときき候ふ。

ちかひのやうは、無上仏にならしめんと誓ひたまへるなり。無上仏と申すは、かたちもなくましまします。かたちもましまさぬゆゑに、自然とは申すなり。かたちましますとしめすときには、無上涅槃とは申さず。かたちもましまさぬやうをしらせんとて、はじめて弥陀仏と申すとぞ、ききならひて候ふ。

弥陀仏は自然のやうをしらせん料なり。この道理を

正業はすなはちこれ念仏なり。念仏はすなはちこれ南無阿弥陀仏なり。南無阿弥陀仏はすなはちこれ正念なりと、知るべしと。

6 （行巻一五・易行品）仏法に無量の門あり。世間の道に難あり、易あり。陸道の歩行はすなはち苦しく、水道の乗船はすなはち楽しきがごとし。菩薩の道もまたかくのごとし。あるいは勤行精進のものあり、あるいは信方便の易行をもつて疾く阿惟越致に至るものあり。乃至〈もし人疾く不退転地に至らんと欲はば、恭敬の心をもつて執持して名号を称すべし〉。もし菩薩、この身において阿惟越致地に至ることを得、阿耨多羅三藐三菩提を成らんと欲はば、まさにこの十方諸仏を念ずべし。名号を称すること『宝月童子所問経』の「阿惟越致品」のなかに説くがごとしと。

7 （行巻一八・論註）つつしんで龍樹菩薩の『十住毘婆沙』を案ずるにいはく、〈菩薩、阿毘跋致を求むるに二種の道あり。一つには難行道、二つには易行道なり。難行道とは、いはく、五濁の世、無仏の時において阿毘跋致を求むるを難とす。（中略）易行道とは、いはく、ただ信仏の因縁をもつて浄土に生ぜんと願ず。仏願力に乗じてすなはちかの清浄の土に往生を得しむ。仏力住持してすなはち大乗正定の聚に入る。正定はすなはちこれ阿毘跋致なり。たとへば水路に船に乗じてすなはち楽しきがごとし〉と。

8 （行巻一九・論註）〈いかんが回向する、一切苦悩の衆生を捨てずして、心につねに作願すらく、回向を首として大悲心を成就することを得たまへるがゆゑに〉とのたまへり。回向に二種の相あり。一つには往相、二つには還相なり。往相とは、おのれが功徳をもつて一切衆生に回施して、作願してともに阿弥陀

遇ふことを得たり、聞きがたくしてすでに聞くことを得たり。真宗の教行証を敬信して、ことに如来の恩徳の深きことを知んぬ。ここをもつて聞くところを慶び、獲るところを嘆ずるなりと。

2 （教巻一、二）つつしんで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。往相の回向について真実の教行信証あり。

それ真実の教を顕さば、すなはち『大無量寿経』これなり。この経の大意は、弥陀、誓を超発して、広く法蔵を開きて、凡小を哀れんで選んで功徳の宝を施することを致す。釈迦、世に出興して、道教を光闡して、群萌を拯ひ恵むに真実の利をもつてせんと欲すなり。ここをもつて如来の本願を説きて経の宗致とす、すなはち仏の名号をもつて経の体とするなり。

3 （行巻・標挙）

諸仏称名の願　浄土真実の行
選択本願の行

4 （行巻一）つつしんで往相の回向を案ずるに、大行あり、大信あり。大行とはすなはち無碍光如来の名を称するなり。この行はすなはちこれもろもろの善法を摂し、もろもろの徳本を具せり。極速円満す、真如一実の功徳宝海なり。ゆゑに大行と名づく。しかるにこの行は大悲の願より出でたり。すなはちこれ諸仏称揚の願と名づく、また諸仏称名の願と名づく、また諸仏咨嗟の願と名づく、また往相回向の願と名づくべし、また選択称名の願と名づくべきなり。

5 （行巻一二）しかれば名を称するに、よく衆生の一切の無明を破し、よく衆生の一切の志願を満てたまふ。称名はすなはちこれ最勝真妙の正業なり。

ゆゑに阿弥陀仏と名づけたてまつると。これを他力といふ。ここをもつて龍樹大士は「即時入必定」（易行品）といへり。曇鸞大師は「入正定聚之数」（論註・上）といへり。仰いでこれを憑むべし。もつぱらこれを行ずべきなり。

14 （行巻七三）おほよそ往相回向の行信について、行にすなはち一念あり、また信に一念あり。行の一念といふは、いはく、称名の遍数について選択易行の至極を顕開す。

15 （行巻七八）しかれば大悲の願船に乗じて光明の広海に浮びぬれば、至徳の風静かに、衆禍の波転ず。すなはち無明の闇を破し、すみやかに無量光明土に到りて大般涅槃を証す、普賢の徳に遵ふなり。

16 （行巻八四）「一乗海」といふは、「一乗」は大乗なり。大乗は仏乗なり。一乗を得るは阿耨多羅三藐三菩提を得るなり。阿耨菩提はすなはちこれ涅槃界なり。涅槃界はすなはちこれ究竟法身なり。究竟法身を得るはすなはち一乗を究竟するなり。異の如来ましまさず。異の法身ましまさず。如来はすなはち法身なり。一乗を究竟するはすなはちこれ無辺不断なり。大乗は二乗・三乗あることなし。二乗・三乗は一乗に入らしめんとなり。一乗はすなはち第一義乗なり。ただこれ誓願一仏乗なり。

17 （行巻九一）「海」といふは、久遠よりこのかた凡聖所修の雑修・雑善の川水を転じ、逆謗闡提・恒沙無明の海水を転じて、本願大悲智慧真実・恒沙万徳の大宝海水と成る。これを海のごときに喩ふるなり。まことに知んぬ、『経』に説きて「煩悩の氷解けて功徳の水と成る」とのたまへるがごとし。

18 （信巻・別序）それおもんみれば、信楽を獲得す

如来の安楽浄土に往生せしめたまへるなり。

9 （行巻二五・礼讃）ただ念仏の衆生を観そなはして、摂取して捨てざるがゆゑに、阿弥陀と名づく。

10 （行巻三〇・玄義分）南無といふは、すなはちこれ帰命なり、またこれ発願回向の義なり。阿弥陀仏といふは、すなはちこれその行なり。この義をもつてのゆゑにかならず往生を得。

11 （行巻三四）発願回向といふは、如来すでに発願して衆生の行を回施したまふの心なり。即是其行といふは、すなはち選択本願これなり。必得往生といふは、不退の位に至ることを獲ることを彰すなり。『経』（大経）には「即得」といへり、釈（易行品）には「必定」といへり。「即」の言は願力を聞くによりて報土の真因決定する時剋の極促を光闡するなり。「必」の言は審なり、然なり、分極なり、金剛心成就の貌なり。

12 （行巻六八・選択集）それすみやかに生死を離れんと欲はば、二種の勝法のなかに、しばらく聖道門を閣きて、選んで浄土門に入れ。浄土門に入らんと欲はば、正・雑二行のなかに、しばらくもろもろの雑行を抛ちて、選んで正行に帰すべし。正行を修せんと欲はば、正・助二業のなかに、なほ助業を傍らにして、選んで正定をもつぱらにすべし。正定の業とはすなはちこれ仏の名を称するなり。称名はかならず生ずることを得。仏の本願によるがゆゑに。

13 （行巻七一）しかれば真実の行信を獲れば、心に歓喜多きがゆゑに、これを歓喜地と名づく。これを初果に喩ふることは、初果の聖者、なほ睡眠し懶堕なれども二十九有に至らず。いかにいはんや十方群生海、この行信に帰命すれば摂取して捨てたまはず。

21 （信巻一三・散善義）〈二者深心〉。深心といふは、すなはちこれ深信の心なり。また二種あり。一つには、決定して深く、自身は現にこれ罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかたつねに没し、つねに流転して、出離の縁あることなしと信ず。二つには、決定して深く、かの阿弥陀仏の四十八願は衆生を摂受して、疑なく慮りなくかの願力に乗じて、さだめて往生を得と信ず。

22 （信巻一三・散善義）たとへば人ありて、西に向かひて行かんとするに、百千の里ならん。忽然として中路に見れば二つの河あり。一つにはこれ火の河、南にあり。二つにはこれ水の河、北にあり。二河おのおの闊さ百歩、おのおの深くして底なし、南北辺なし。まさしく水火の中間に一つの白道あり、闊さ四五寸ばかりなるべし。この道、東の岸より西の岸に至るに、また長さ百歩、その水の波浪交はり過ぎて道を湿す。その火焔また来りて道を焼く。水火あひ交はりて、つねにして休息することなけん。この人すでに空曠のはるかなるところに至るに、さらに人物なし。多く群賊・悪獣ありて、この人の単独なるを見て、競ひ来りてこの人を殺さんとす。死を怖れてただちに走りて西に向かふに、忽然としてこの大河を見て、すなはちみづから念言すらく、〈この河、南北に辺畔を見ず、中間に一つの白道を見る、きはめてこれ狭少なり。二つの岸あひ去ること近しといへども、なにによりてか行くべき。今日さだめて死せんこと疑はず。まさしく到り回らんと欲へば、群賊・悪獣、漸々に来り逼む。まさしく南北に避り走らんとすれば、悪獣・毒虫、競ひ来りてわれに向かふ。まさしく西に向かひて道を尋ねて去かんとすれば、またおそ

ることは、如来選択の願心より発起す。真心を開闡することは、大聖矜哀の善巧より顕彰せり。しかるに末代の道俗、近世の宗師、自性唯心に沈みて浄土の真証を貶す、定散の自心に迷ひて金剛の真信に昏し。

ここに愚禿釈の親鸞、諸仏如来の真説に信順して、論家・釈家の宗義を披閲す。広く三経の光沢を蒙りて、ことに一心の華文を開く。しばらく疑問を至してつひに明証を出す。まことに仏恩の深重なるを念じて、人倫の哢言を恥ぢず。浄邦を欣ふ徒衆、穢域を厭ふ庶類、取捨を加ふといへども毀謗を生ずることなかれとなり。

19 （信巻・標挙）

至心信楽の願　正定聚の機

20 （信巻一）つつしんで往相の回向を案ずるに、大信あり。大信心はすなはちこれ長生不死の神方、欣浄厭穢の妙術、選択回向の直心、利他深広の信楽、金剛不壊の真心、易往無人の浄信、心光摂護の一心、希有最勝の大信、世間難信の捷径、証大涅槃の真因、極速円融の白道、真如一実の信海なり。この心すなはちこれ念仏往生の願より出でたり。この大願を選択本願と名づく、また本願三心の願と名づく、また至心信楽の願と名づく、また往相信心の願と名づくべきなり。しかるに常没の凡愚、流転の群生、無上妙果の成じがたきにあらず、真実の信楽まことに獲ること難し。なにをもつてのゆゑに、いまし如来の加威力によるがゆゑなり、博く大悲広慧の力によるがゆゑなり。たまたま浄信を獲ば、この心顛倒せず、この心虚偽ならず。ここをもつて極悪深重の衆生、大慶喜心を得、もろもろの聖尊の重愛を獲るなり。

の二河〉といふは、すなはち衆生の貪愛は水のごとし、瞋憎は火のごとしと喩ふ。〈中間の白道四五寸〉といふは、すなはち衆生の貪瞋煩悩のなかに、よく清浄願往生の心を生ぜしむるに喩ふ。いまし貪瞋強きによるがゆゑに、すなはち水火のごとしと喩ふ。善心、微なるがゆゑに、白道のごとしと喩ふ。また〈水波つねに道を湿す〉とは、すなはち愛心つねに起りてよく善心を染汚するに喩ふ。また〈火焔つねに道を焼く〉とは、すなはち瞋嫌の心よく功徳の法財を焼くに喩ふ。〈人、道の上を行いて、ただちに西に向かふ〉といふは、すなはちもろもろの行業を回してただちに西方に向かふに喩ふ。〈東の岸に人の声の勧め遣はすを聞きて、道を尋ねてただちに西に進む〉といふは、すなはち釈迦すでに滅したまひて、後の人見たてまつらず、なほ教法ありて尋ぬべきに喩ふ、すなはちこれを声のごとしと喩ふるなり。〈あるいは行くこと一分二分するに群賊等喚び回す〉といふは、すなはち別解・別行・悪見の人等、妄りに見解をもつてたがひにあひ惑乱し、およびみづから罪を造りて退失すと説くに喩ふるなり。〈西の岸の上に人ありて喚ばふ〉といふは、すなはち弥陀の願意に喩ふ。〈須臾に西の岸に到りて善友あひ見て喜ぶ〉といふは、すなはち衆生久しく生死に沈みて、曠劫より輪廻し、迷倒してみづから纏ひて、解脱するに由なし。仰いで釈迦発遣して、指へて西方に向かへたまふことを蒙り、また弥陀の悲心招喚したまふによつて、いま二尊の意に信順して、水火の二河を顧みず、念々に遣ることなく、かの願力の道に乗じて、捨命以後かの国に生ずることを得て、仏とあひ見て慶喜すること、なんぞ極まらんと喩ふるなり。

らくはこの水火の二河に堕せんことを〉と。時にあたりて惶怖することまたいふべからず。すなはちみづから思念すらく、〈われいま回らばまた死せん、住まらばまた死せん、去かばまた死せん。一種として死を勉れざれば、われ寧くこの道を尋ねて前に向かひて去かん。すでにこの道あり、かならず可度すべし〉と。この念をなすとき、東の岸にたちまちに人の勧むる声を聞く、〈きみただ決定してこの道を尋ねて行け。かならず死の難なけん。もし住らばすなはち死せん〉と。また西の岸の上に、人ありて喚ばひていはく、〈なんぢ一心に正念にしてただちに来れ、われよくなんぢを護らん。すべて水火の難に堕せんことを畏れざれ〉と。この人、すでにここに遣はし、かしこに喚ばふを聞きて、すなはちみづからまさしく身心に当りて、決定して道を尋ねてただちに進んで、疑怯退心を生ぜずして、あるいは行くこと一分二分するに、東の岸の群賊等喚ばひていはく、〈きみ回り来れ。この道嶮悪なり。過ぐることを得じ。かならず死せんこと疑はず。われらすべて悪心あつてあひ向かふことなし〉と。この人、喚ばふ声を聞くといへども、またかへりみず、一心にただちに進んで道を念じて行けば、須臾にすなはち西の岸に到りて、永くもろもろの難を離る。善友あひ見て慶楽すること已むことなからんがごとし。これはこれ喩へなり。

次に喩へを合せば、〈東の岸〉といふは、すなはちこの娑婆の火宅に喩ふ。〈西の岸〉といふは、すなはち極楽宝国に喩ふ。〈群賊・悪獣詐り親しむ〉といふは、すなはち衆生の六根・六識・六塵・五陰・四大に喩ふ。〈無人空迥の沢〉といふは、すなはちつねに悪友に随ひて真の善知識に値はざるに喩ふ。〈水火

獲得するなり。本願力の回向の大信心海なるがゆゑに、破壊すべからず。これを金剛のごとしと喩ふるなり。

26 （信巻六〇）それ真実の信楽を案ずるに、信楽に一念あり。一念とはこれ信楽開発の時剋の極促を顕し、広大難思の慶心を彰すなり。

27 （信巻六五）金剛の真心を獲得すれば、横に五趣八難の道を超え、かならず現生に十種の益を獲。なにものか十とする。一つには冥衆護持の益、二つには至徳具足の益、三つには転悪成善の益、四つには諸仏護念の益、五つには諸仏称讃の益、六つには心光常護の益、七つには心多歓喜の益、八つには知恩報徳の益、九つには常行大悲の益、十には正定聚に入る益なり。

28 （信巻七三）横超断四流といふは、横超とは、横は竪超・竪出に対す、超は迂に対し回に対するの言なり。竪超とは大乗真実の教なり。竪出とは大乗権方便の教、二乗・三乗迂回の教なり。横超とはすなはち願成就一実円満の真教、真宗これなり。また横出あり、すなはち三輩・九品、定散の教、化土・懈慢、迂回の善なり。大願清浄の報土には品位階次をいはず。一念須臾のあひだに、すみやかに疾く無上正真道を超証す。ゆゑに横超といふなり。

29 （信巻八四）真の仏弟子といふは、真の言は偽に対し仮に対するなり。弟子とは釈迦諸仏の弟子なり、金剛心の行人なり。この信行によりてかならず大涅槃を超証すべきがゆゑに、真の仏弟子といふ。

30 （信巻一〇三）まことに知んぬ、弥勒大士は等覚の金剛心を窮むるがゆゑに、竜華三会の暁、まさに無上覚位を極むべし。念仏の衆生は横超の金剛心を窮

23 （信巻一八）しかれば、もしは行、もしは信、一事として阿弥陀如来の清浄願心の回向成就したまふところにあらざることあることなし。因なくして他の因のあるにはあらざるなりと、知るべし。

24 （信巻二一）また問ふ。字訓のごとき、論主の意、三をもつて一とせる義、その理しかるべしといへども、愚悪の衆生のために阿弥陀如来すでに三心の願を発したまへり。いかんが思念せんや。

答ふ。仏意測りがたし。しかりといへども、ひそかにこの心を推するに、一切の群生海、無始よりこのかた乃至今日今時に至るまで、穢悪汚染にして清浄の心なし、虚仮諂偽にして真実の心なし。ここをもつて如来、一切苦悩の衆生海を悲憫して、不可思議兆載永劫において、菩薩の行を行じたまひしとき、三業の所修、一念一刹那も清浄ならざることなし、真心ならざることなし。如来、清浄の真心をもつて、円融無碍不可思議不可称不可説の至徳を成就したまへり。如来の至心をもつて、諸有の一切煩悩悪業邪智の群生海に回施したまへり。すなはちこれ利他の真心を彰す。ゆゑに疑蓋雑はることなし。この至心はすなはちこれ至徳の尊号をその体とせるなり。

25 （信巻四六）まことに知んぬ、二河の譬喩のなかに「白道四五寸」といふは、白道とは、白の言は黒に対するなり。白はすなはちこれ選択摂取の白業、往相回向の浄業なり。黒はすなはちこれ無明煩悩の黒業、二乗・人・天の雑善なり。道の言は路に対せるなり。道はすなはちこれ本願一実の直道・大般涅槃、無上の大道なり。路はすなはちこれ二乗・三乗、万善諸行の小路なり。四五寸といふは衆生の四大五陰に喩ふるなり。「能生清浄願心」といふは、金剛の真心を

35 （信巻一一八）ここをもつて、いま大聖の真説によるに、難化の三機、難治の三病は、大悲の弘誓を憑み、利他の信海に帰すれば、これを矜哀して治す、これを憐愍して療したまふ。たとへば醍醐の妙薬の、一切の病を療するがごとし。濁世の庶類、穢悪の群生、金剛不壊の真心を求念すべし。本願醍醐の妙薬を執持すべきなりと、知るべし。

36 （証巻一）つつしんで真実の証を顕さば、すなはちこれ利他円満の妙位、無上涅槃の極果なり。すなはちこれ必至滅度の願より出でたり。また証大涅槃の願と名づくるなり。しかるに煩悩成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相回向の心行を獲れば、即のときに大乗正定聚の数に入るなり。正定聚に住するがゆゑに、かならず滅度に至る。かならず滅度に至るはすなはちこれ常楽なり。常楽はすなはちこれ畢竟寂滅なり。寂滅はすなはちこれ無上涅槃なり。無上涅槃はすなはちこれ無為法身なり。無為法身はすなはちこれ実相なり。実相はすなはちこれ法性なり。法性はすなはちこれ真如なり。真如はすなはちこれ一如なり。しかれば弥陀如来は如より来生して、報・応・化・種々の身を示し現じたまふなり。

37 （証巻七・論註）『経』にのたまはく、〈もし人ただかの国土の清浄安楽なるを聞きて、剋念して生ぜんと願ぜんものと、また往生を得るものとは、すなはち正定聚に入る〉と。これはこれ国土の名字仏事をなす。いづくんぞ思議すべきやと。

38 （証巻九・論註）『論』にいはく、「〈荘厳清浄功徳成就とは、『偈』に、《観彼世界相勝過三界道》といへるがゆゑに〉（浄土論）と。これいかんぞ不思議なるや。凡夫人の煩悩成就せるありて、またかの浄土

むるがゆゑに、臨終一念の夕べ、大般涅槃を超証す。ゆゑに便同といふなり。しかのみならず金剛心を獲るものは、すなはち韋提と等しく、すなはち喜・悟・信の忍を獲得すべし。これすなはち往相回向の真心徹到するがゆゑに、不可思議の本誓によるがゆゑなり。

31 （信巻一〇六）仮といふは、すなはちこれ聖道の諸機、浄土の定散の機なり。

32 （信巻一一〇）偽といふは、すなはち六十二見・九十五種の邪道これなり。

33 （信巻一一三）まことに知んぬ。悲しきかな愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快しまざることを、恥づべし傷むべしと。

34 （信巻一一四）それ仏、難治の機を説きて、『涅槃経』にのたまはく、「迦葉、世に三人あり、その病治しがたし。一つには謗大乗、二つには五逆罪、三つには一闡提なり。かくのごときの三病、世のなかに極重なり。ことごとく声聞・縁覚・菩薩のよく治するところにあらず。善男子、たとへば病あればかならず死するに、治することなからんに、もし瞻病随意の医薬あらんがごとし。もし瞻病随意の医薬なからん、かくのごときの病、さだめて治すべからず。まさに知るべし、この人かならず死せんこと疑はずと。善男子、この三種の人またまたかくのごとし。仏・菩薩に従ひて聞治を得をはりて、すなはちよく阿耨多羅三藐三菩提心を発せん。もし声聞・縁覚・菩薩ありて、あるいは法を説き、あるいは法を説かざるあらん、それをして阿耨多羅三藐三菩提心を発せしむることあたはず」と。

に生ずることを得れば、三界の繋業、畢竟じて牽かず。すなはちこれ煩悩を断ぜずして涅槃分を得。いづくんぞ思議すべきや」と。

39 （証巻一三）それ真宗の教行信証を案ずれば、如来の大悲回向の利益なり。ゆゑに、もしは因、もしは果、一事として阿弥陀如来の清浄願心の回向成就したまへるところにあらざることあることなし。因、浄なるがゆゑに果また浄なり。

40 （証巻一五・浄土論）出第五門とは、大慈悲をもつて一切苦悩の衆生を観察して、応化の身を示す。生死の園、煩悩の林のなかに回入して、神通に遊戯して教化地に至る。本願力の回向をもつてのゆゑに。これを出第五門と名づく。

41 （証巻一六・論註）還相とは、かの土に生じをはりて、奢摩他・毘婆舎那・方便力成就することを得て、生死の稠林に回入して、一切衆生を教化して、ともに仏道に向かへしむるなり。もしは往、もしは還、みな衆生を抜いて生死海を度せんがためなり。このゆゑに、〈回向を首として大悲心を成就することを得たまへるがゆゑに〉（浄土論）とのたまへり。

42 （証巻一七・論註）上の国土の荘厳十七句と、如来の荘厳八句と、菩薩の荘厳四句とを広とす。入一法句は略とす。なんがゆゑぞ広略相入を示現するならば、諸仏菩薩に二種の法身あり。一つには法性法身、二つには方便法身なり。法性法身によりて方便法身を生ず。方便法身によりて法性法身を出す。この二の法身は異にして分つべからず。一にして同じかるべからず。このゆゑに広略相入して、統ぬるに法の名をもつてす。菩薩、もし広略相入を知らざれば、すなはち自利利他するにあたはず。